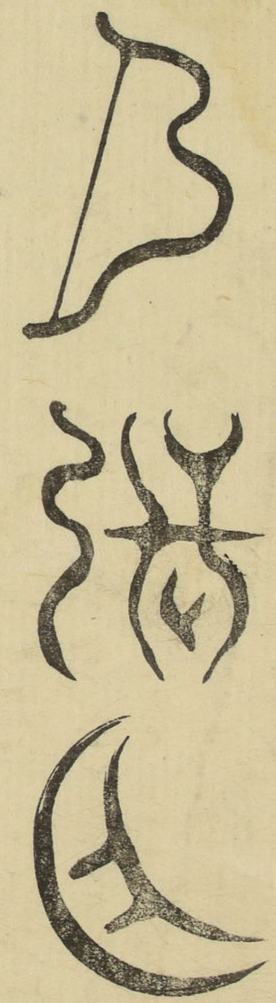
# 春宵弓張月 前編 三

へ13
3692
3

門へ13
號 3692
卷 3

# 曲亭翁原稿　西馬老人綴



# 滿足

東京書房　文昇堂熊谷梓



□其文章と緒加画は　錦界堂梓

巻と児女の視軽

増数の例の袋入草紙に改行せる処あり　初編の配あると殊の外御慰ふまひ

り矢篇とお埒は着宮諸方より御催促あり書賈始一統のごとく是全く武士男れ

笑名萬世にかぐやく八郎大明神の御利益と感涙肝ふかく既に夏三編迫出板に及び

ぬ　文政庚寅年四月上旬より八丈島正一位為朝大明神の尊像御興雇始る由折ふ幸ひ

よく八編迫来秋中捐遠ゆく賞出し画工彫師出情仕尤著述八四十年は昔とあれど又新

く嬰木に咲せる花の八重次路あもまと三十五年目は御神縁時代移り御方八咄ふ知やもら

ぬひの心づくしの離ゆく年経て後にめぐり逢ふ心も深き為朝ふ爰ふ妹背の再會と契る趣

向八翁の著意よく綴まつ古人は奇書尾籠と氣障をかくれば讃ふ自ら心潔く御名を

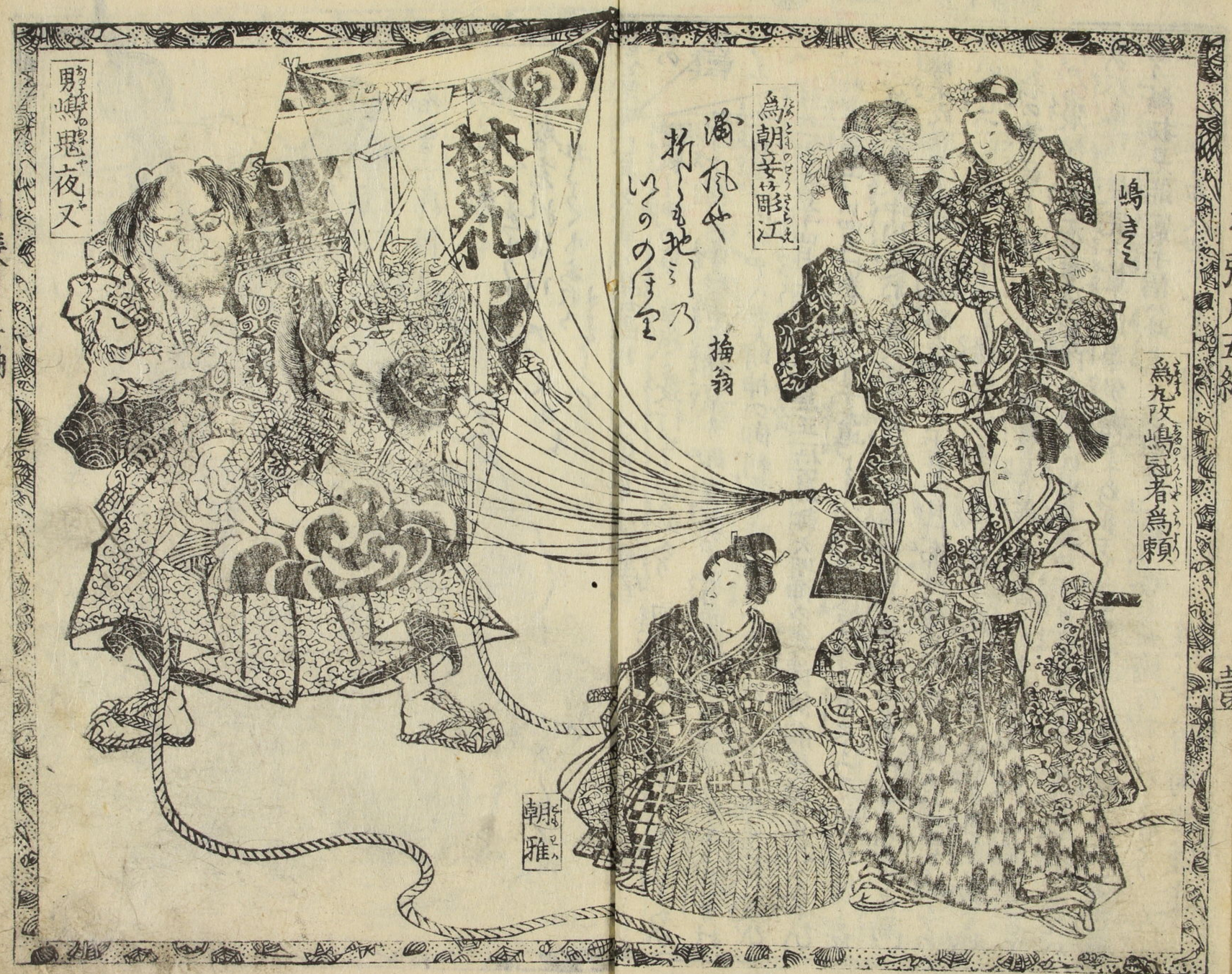
門戸に張おけば疱瘡麻疹を除くとゆゑに此草紙の蒲尾迫八ひく度ふ尊名を唱へられば

その双帋に一度完る筆八悪事災難とまめぐるさく福壽延命を授受給へとの御神慮

あり紙板見能寸最手摺八此店にて出まし四輯讃で五編の求られませう

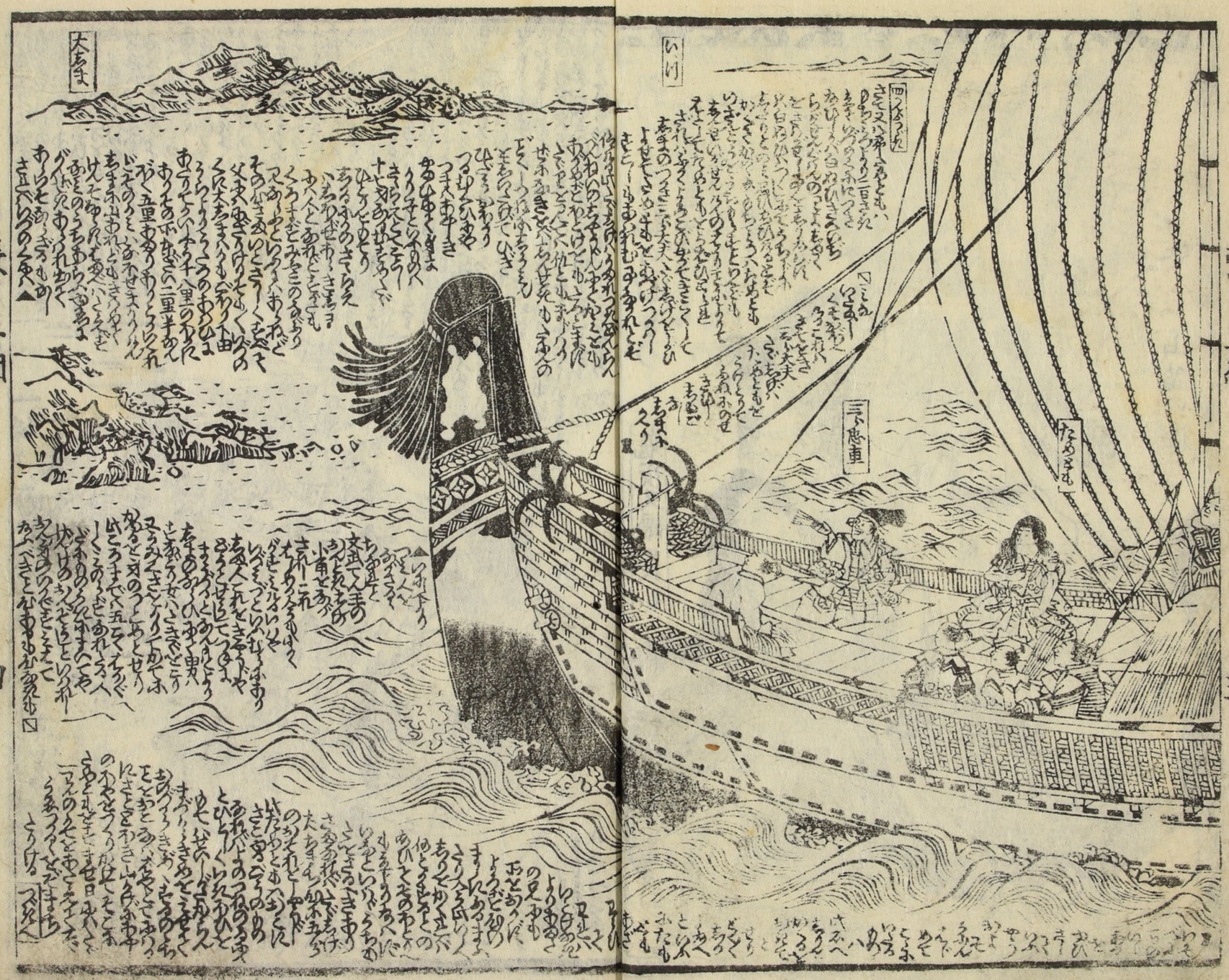
嘉永四辛亥年初夏

樂亭西馬恐謹述


嶋きく
爲朝妾影江
渦巻や
折しも地引乃
いさのの屋
掬翁
爲九郎嶋冠者爲頼
朝雅
明鳥の鬼夜叉

御曹子爲朝

三郎大夫忠重


大きま
いけ
四くなうん
三ふ悪重
みなのそも

三郎忠重
烏とも

鳥朝

冠者烏朝

鳥朝

鳥朝

為朝

烏朝
さくらえ
忠重

さくらえ
烏朝
朝ころ
烏九

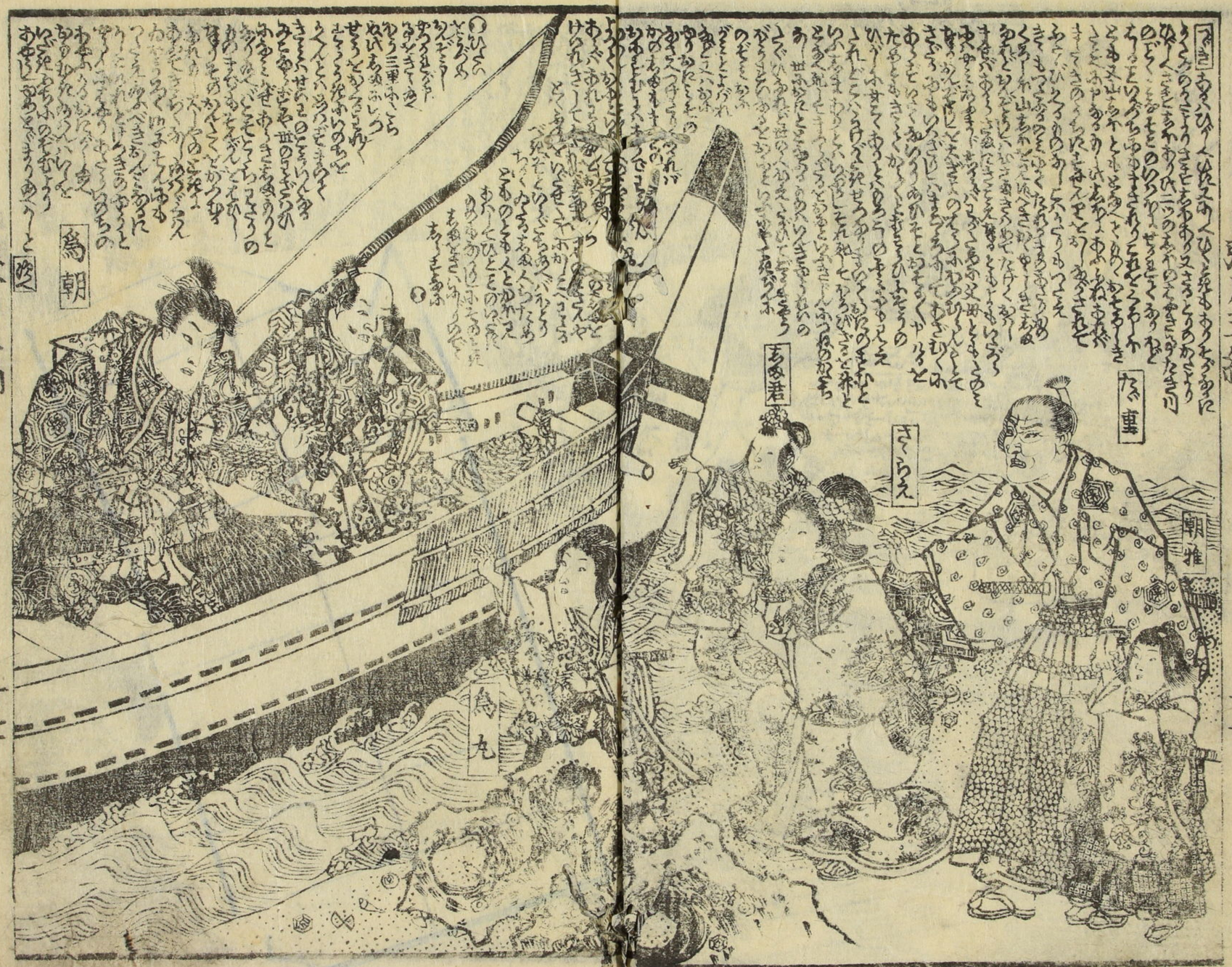
白ぬひ

細平次
白ぬひ

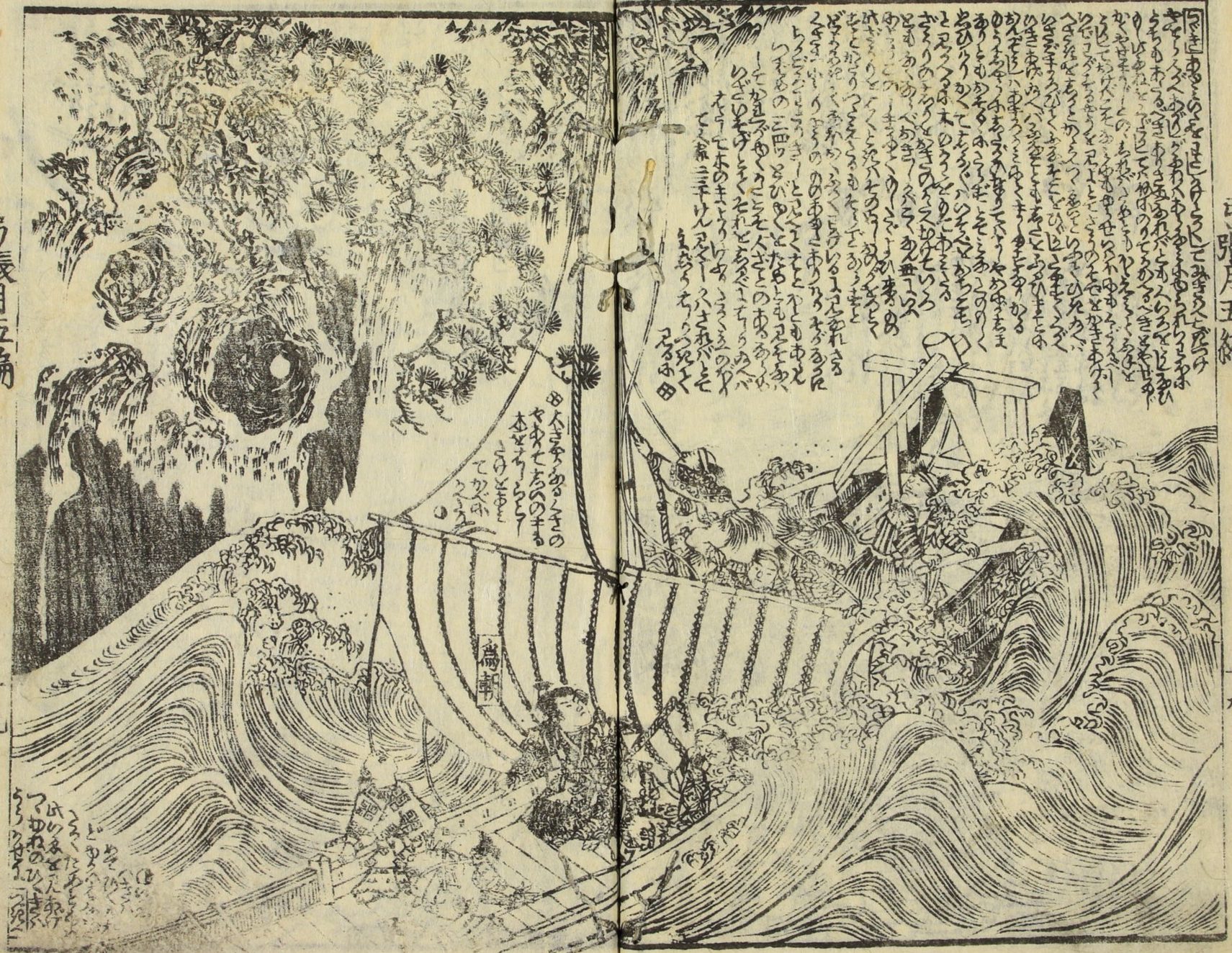
白ぬい


あまくり

宗德院
白ぬひ


月岡芳年
明治五年
さくらえ
朝雅
ちあき君
為朝

烏朝


為朝

爲朝

為朝物語、保元平治盛衰記と治ちあるこの書に載こと多くのく伊豆の大島へ配流せらるゝと限と、此弓張月と其大既と素ちて鎮西に生立てこそ後諸嶋と經巡り琉球に渡る事は補綴ちれ、全く著作堂の翁の妙案ありて又珍しき奇談ありて能行きてく四十余年に今獅蘆に沈さると書肆の惑るふより。是に画圖と增文と略して去年より梓行あり既に當夏五の巻に至りて爰に事ひ八郎大明神の御開扉ありて。諸願利益のも蔭にや納京盛寝と人の氣も草紙に拔らぬ暑に最中。新板はまで出ぬと御催促と重陽に頂ふ。はさろ軒の燈籠や祇園會のぞんちん繁く陽氣に端居ぞの雜子の馬蹄に早いと仰も扨く常に倍せ。配せに部數の刷くちと衆地ゆく板元頻りに六七の巻拙兎に夏御子のきゝの遠音と聞みこと内に居兼る童雅にさいぐに奪くして、極暑も厭ひ走廻り彫師画工に附車に逃脱思案の僕も土用掃の手傳をる意ふ毫の採配れ乃疊汗と拭くえいやもと。三帖補誌あぐる事ちゝ狂。

嘉永五壬子歳孟春新刻

夷福庵西馬述

疱瘡鬼
御曹子の
武勇を怕れて
八丈島へさらり
ゐり給ふの御名
ある地へ
末世立よらば
と誓詞と
鎮西
源八郎
為朝
海乃達ら
為朝
鬼夜叉
七郎三郎

為朝の二男朝稚
足利義康の養子となり
後ふ足利太郎
義包と名乗
為朝の側室
鬱江
足利義康
近臣
深田
二郎
時
能
大嶋の
三郎太夫
忠重
祖代

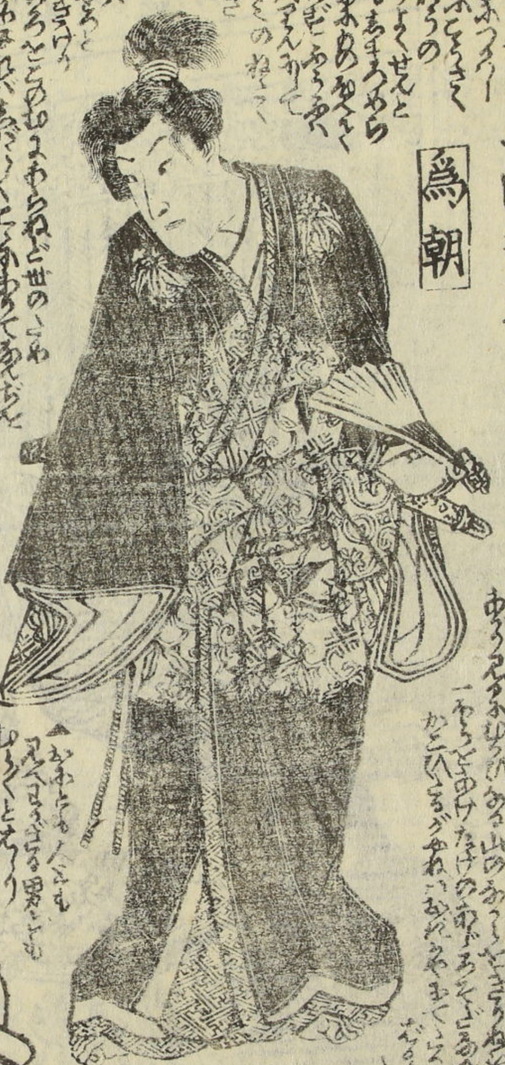
長女

長女

爲朝

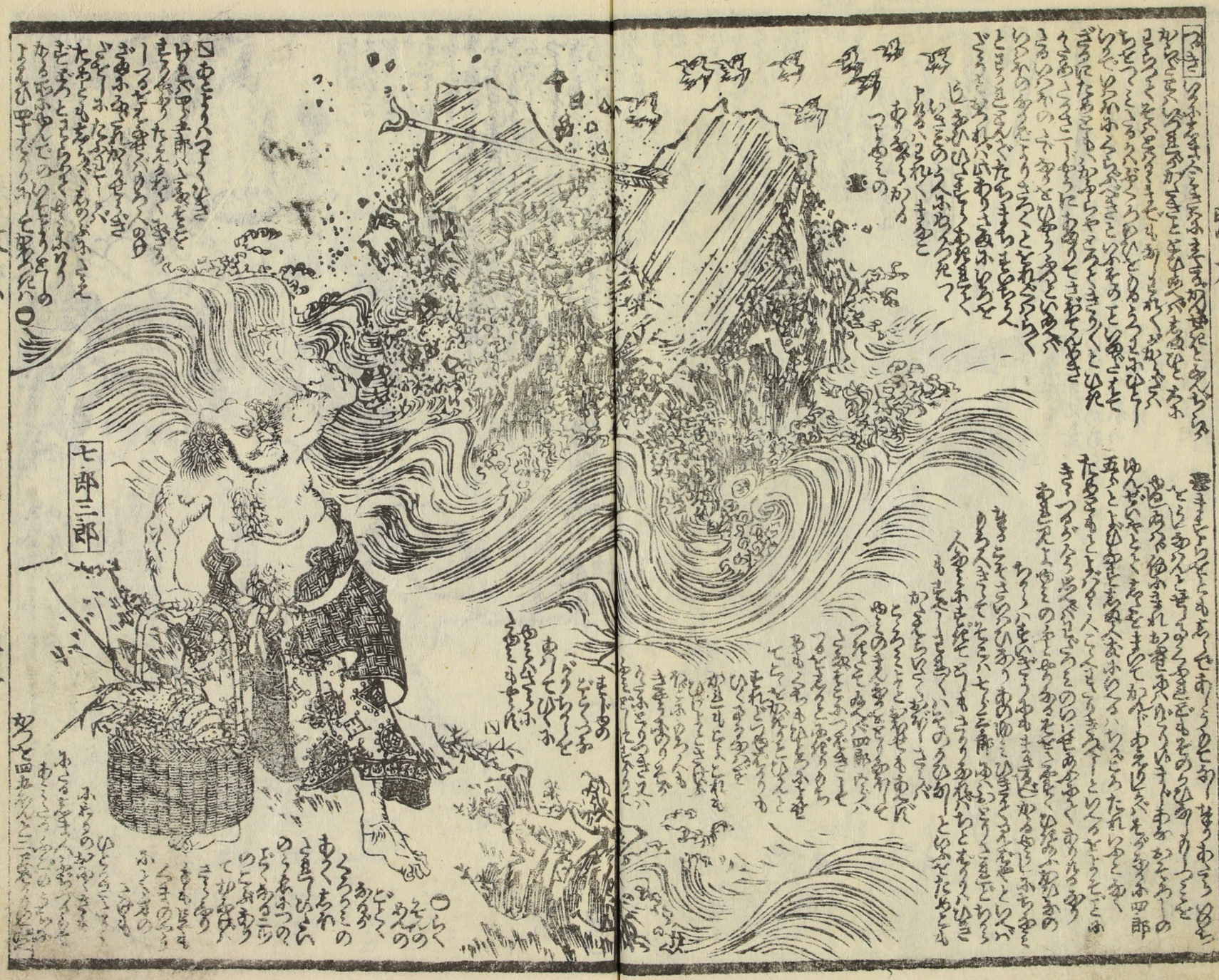
大波
長女かさ
大波

長女


爲朝

大波
長女
太郎丸
治郎丸

西馬模譯　國輝画圖


七郎三郎

七郎三郎


爲朝

長女

七郎三郎

鬼夜叉

波



烏朝

太郎丸

次郎丸

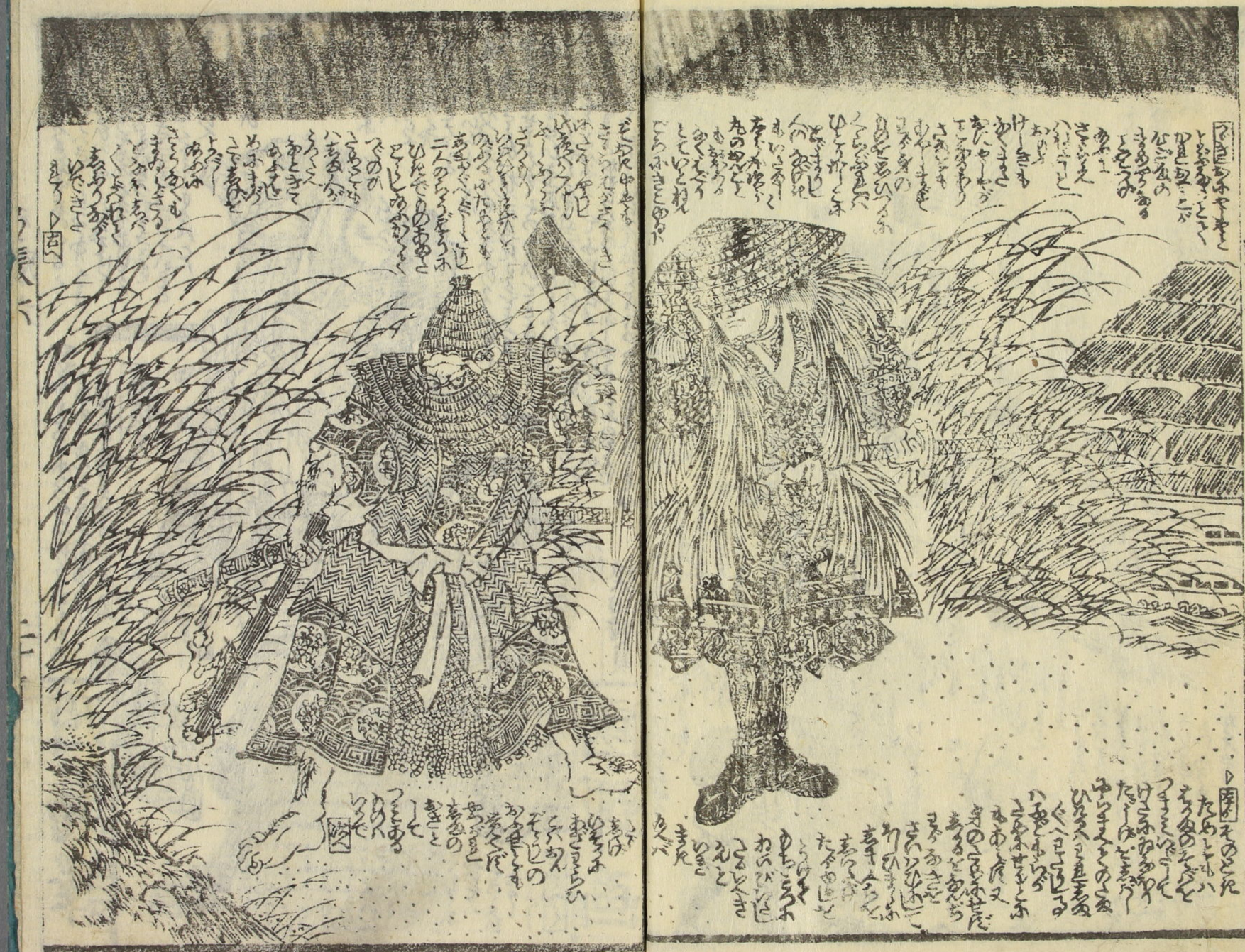
四郎五郎

爲朝
鬼夜叉

爲朝
朝雅
伝彫江

さてらえん
たまつる
たまま君
たまゝ丸

さくらえ
鬼夜叉
鳥朝
大夫恵童



西馬譚
鬼夜叉
源田時貞
國輝画